

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

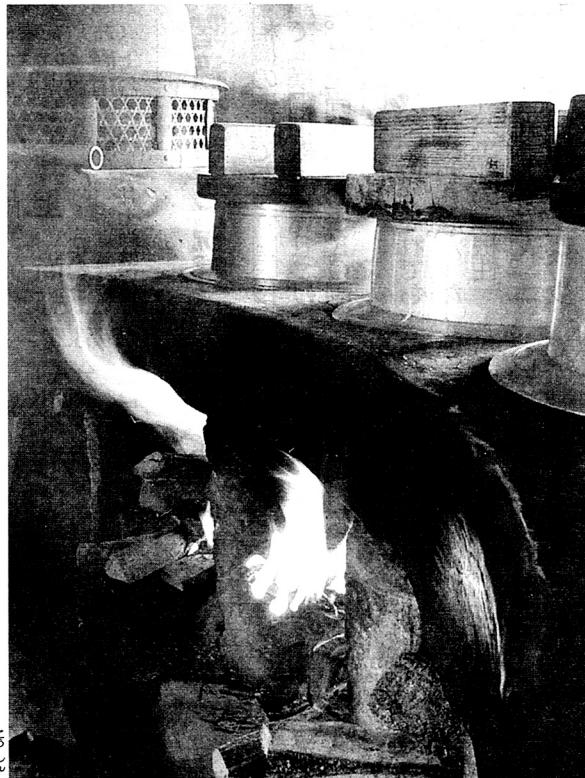
柳田国男は民俗学の対象を、目に見える「有形文化」、耳に聞こえる「言語芸術」「微妙な心意に関する「心意現象」に三分した。心意現象とは、占いや幽霊、民間医療など感覚に訴えて理解できるものとした。これまで触れたきた「靈柩車」と親指の問題も「俗信」の一つで、俗信は心霊現象の大きな分野である。俗信とは一般に人々に信じられていることであるが、井之口章次は「超人的な力の存在を信じ、それに対処する知識や技術」としていられる（『日本の俗信』）。

俗信は「兆・占・禁・呪」に分けられる。鳥鳴き・茶柱などを通じて、何らかの知らせだと感じるのが「予兆」。くじ占・粥占など、こちらから積極的に何かを知りうとするのが「ト占」。夜爪や夜の口笛など、しないことで望まぬ事態を避けるのが「禁忌」。積極的に願掛け・お百度などをすることで、望みをかなえようとするのが「呪術」である。靈柩車を見かけて親指を隠すのは、望まぬことが起きないように自ら行う「呪術」と言える。

昭和34～36（1959～61）年ごろ、五條市大阿地区の婦人学級の活動で「迷信しらべ」が行われたことがある。この

俗信のいろいろ

婦人学級は、専門家による郷土史などの教養講座や食生活の改善などを行つて親睦を深めていたが、「迷信」調査という名前から、生活改善のために行われたと思われる。同地の北山硯子さんから、婦人学級の代表を務めていた母親の公子さんが保管していた当時の



旧臼井家住宅のカマド—大和郡山市の県立大和民俗公園で筆者撮影

資料を見せてもらったところがある。21人の女性が書き出したさまざまな俗信は、総数321件あった。これを衣食住、身体、病気、屋敷、動植物、天候などに分類すると、吉野川流域の大阿太地域において、農作業や家庭などで、寒に細やかに配慮

したながら、具体的な暮らし方が曾まれていたことがよく分かる。

食の分野では、小正月の小豆粥を噴きこぼすと田植えに風が吹く、盆の月にお茶や、みそを作る月にお餅つきに犬が鳴ぐ、庚申の日にみそを食べると風邪をひくなどがあった。餅つきに臼で手をつくと一生傷になる、失せ物はカマドに塩を置くと出てくる、大晦日に風呂に入らないとフクロウになる、流し台に熱湯を流してはいけない、藁葺きの屋根だけ

こうした俗信の数々は、生活の近代化、医療技術の進歩などで、実態そのものがなくなつたこと後が続くなどもあつた。

燃えた時は、大きい家に建て替えられる、出産で胎盤が降りないと、屋根にタワシを投げ上げる、子供のない人は、胎盤が温かいうちにまだがせて上げると鼻の高い子ができる、夜尿は近所に塩をもらいに行くと治るなどいう。蛇を指さすと指が腐る、蛇の夢を見ると金に縁があるなど蛇に関する俗信、葬式に早く歩くと後が続くなどもあつた。

こうした俗信の数々は、生活の近代化、医療技術の進歩などで、実態そのものがなくなつたこと後が続くようになり、解決できるようになつたりしたことも多いが、その後、私たちはどのような新たな俗信の世界にいるのだろうか。（奈良民俗文化研究所代表）